

大黒天

大黒天は食物、農民、繁栄、富の神様として知られている。ここでは、大黒天の細い、人を寄せ付けないような顔立ちは、マハーカーラと呼ばれるインドの戦争の神としての元来の起源を反映している。この像は日本人が描く一般的な大黒天の姿、すなわち、米俵2表の上に立ち、小槌と大きな宝の入った袋を持ち、にっこりと微笑んだ太った姿からかけ離れている。

本像は高さ 1.71 m で、日本の大黒天の中で現存する最も古い像である。他の多くの大黒天と比べると、これは特に背が高い。この大きさにも関わらず、この博物館の規模からしてみるとやや小さく見え、より大きな人目を引く彫像と比べると見劣りがする。

本像は平安時代後期（794-1185）に遡る。仏師は一塊のクス材から大黒天を彫った。一般的な像とは違う解釈のため、日本の仏陀像の中で注目に値するとされている。この像の前に置かれているのは、お守りの御利益で、食べ物を守る（飢えることがない）という意味です。